

# ブルース・リー、半裸身の「真実」

野崎 歓

(フランス文学者、翻訳家)

ブルース・リー、1973年7月20日没。

本当は存在していないにもかかわらず、今もその姿がはっきりと「見えて」しまうのはなぜだろう？ 仮想の現実よりもはっきりと「爪痕」を残し続ける半裸のデッドスター、その限りなき戦いを読み解く。

## メタバースの英雄？

ブルース・リー、没後五〇年と聞いても、どこかぴんと来ないところがある。「あなたは永遠に若い」と言いたくなる。

ブルースの弟ロバートは、一九六〇年代後半、香港でロックバンド「サンダーバード」を結成し人気を博した。兄とは異なり今も健在であることを、ネット上で確かめることができる。年輪を重ねたその温顔を見ると、ブルースが若いならば似たような顔立ちになっていたのではという思いに誘われる。同時に、老いほどブルースと縁遠い概念はないとも思えるのだ。

ブルースは半世紀にわたり、この世に存在しないにもかかわらず、映画の中で、さらには映画を介して他のメディアでも、常に変わらず若々しく現存し続けてきた。つまり、ブルースとは仮想現実空間におけるヒーローであり、デジタルアバターであったとも考えられる。メタバースの時代にはるかに先駆けたそのヴァーチャルな威力は、香港市民の心身に深く浸透していた。その思いがけない結果として、二〇一四年以来、二〇〇万を超える香港市民が民主化を求めて立ち上がったとき、彼らの運動にはブルースの言葉「Be water, my friend」にちなみ「流水革命」

命」の名が与えられたのである。

だが、ブルースこそは、メタバースの対極に位置するという思いも禁じえない。あるいは、メタバースには決して回収されえないというべきか。比較に値するのがミシェル・ヨーの場合だ。「エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス」(二〇二二年)が、傑出したアクションスターとしての彼女の存在ぬきでは成り立たない作品だったことは確かだ。しかし並行世界を経ぐるヒロインの奇想天外な活躍が、もっぱら目まぐるしいモニタージュ操作に依存するものだったことも否定できない。観客は複雑なゲーム的錯綜のうちに、いわば無理やり閉じ込められる。あの映画からまさにVRヘッドセットによる拘束状態の窒息感に似た印象を受けたとしたら、自分がメタバースの進展についていけない証拠だろうか？

だが「エブエブ」とは正反対の、なまな映像をそのままつないだ作品におけるミシェル・ヨーの過酷な体験の数々を思い出すとき、メタバースとは決してリアルファイトではないという事実が浮き彫りになる。彼女が『ポリス・ストーリー3』(一九九二年)で、疾駆するバイクにまたがったまま貨物列車の屋根に飛び移る場面や、『スタントウーマン/夢の破片』(一九九六



# Part 1

## ブルース・リーがわかれば メタバースがわかる

ブルース・リー、1973年7月20日没、享年32歳。  
50年の不在を前提としながら現在も世界中を魅了している点が、メタバース的な何かを感じさせる。